音樂學校編『近世邦樂年表』、其の他何々と數へ來れば枚擧に遑なき程である。私も過去十數年來『三田文學』其の他の諸雜誌、朝日、日々、時事、國民、報知、讀賣、都、等の諸新聞に人形芝居に關する論文や記事を屢々寄稿して來た。先年宮良當壯君は『沖繩の人形芝居』を、昨夏南江二郎君は『人形劇の研究』を公にした。人形芝居專門の書として私の知る範圍では他に知つて居らない。

日本の人形芝居の文獻（未定稿）

（これは小澤さんが昨夜一睡もされずに、文獻を書かれた時、日本の部になつて力盡き、あとは宜しくやつてくれと云はれ、仕方なしに私が引受けた、甚だ不完全な未定稿である事を、始めにおことはりします。なほこれに就ては、本田安次君にも御迷惑をかけました。）

一　傀儡子記、遊女記

大江匡房（天永二年死？　西紀一一一一死）の有名な此の文章は、朝野群載卷三に在る。本誌にも便宜のせた。

二　舊記拾葉集

「古事類苑」樂舞部二の三五九、三六一ページに、延寶八年（一六八〇）、及び享保四年（一七一九）の資料がある。原文は私は未だ見てをらぬ。御用覺帳だから確實な資料といふべきであらう。

三　昔昔物語

國書刊行會本「近世風俗見聞集」の中に收めてある。同書の底本に依ると新見正朝が、慶長より寛文、延寶に至る江戸の風俗を、老後の享保年間（一七一六―一七三五）に書き記したのだと云ふ。然し又一本「存採叢書」中のものに依ると、財津種爽なる人が、八十歳の折の述作といひ、寛延二年（一七四九）野田瓊華の奥書がある。「燕石十種」第四卷六に收めてあるのは、享保十八年（一七三三）の寫本といふ。堺町の操芝居を記してある。

四　東海道名所記

淺井了意が萬治元年（一六五八）に書き、寛文年中（一

六六一—一六七二）に出版。卷六の京都の記事に操の事を記す。溫知叢書第一編に收めらる。

五 奈良柴

原武太夫（原盛和）の著、著者は元祿十年（一六九七）の生れだが、此書の刊行を享保以降（一七一六—）と云ふ。一名を「三絃根元記」といふ。江方と上方のあやつりに就て述べてある。溫知叢書第八に在り。

六 今昔操年代記

正本屋九左衞門、卽ち西澤一風の著。享保十二年（一七二七）版。然し記事は操よりも淨るりの方が多い。新群書類從第六に在り。

七 近代世事談

菊岡沾凉の著、享保十八年版（一七三三）。卷三に淨るり、人形の記事、辰松八郎兵衞の繪がある。辰松に關する文章は、そつくり後に出る本に取られてゐる。溫知叢書第三に。

八 竹豐故事

浪速散人一樂の著。寶曆六年版（一七五六）。竹本座、豐竹座の記事をのせる。新群書類從第六に、

九 倒冠雜誌

白德齋の著。寶曆九年版（一七五九）。操りの舞臺藝術としての貴重な記事をのせてゐる。活字に印刷はされてゐぬらしい。上野の圖書館にある。

一〇 南水漫遊拾遺

濱松歌國（颯々亭南水）の著。安永五年——文政十年（一七七六—一八二七）の人だ。人形の資料豐富だ。新群書類從第二に。

一一 戲場樂屋圖會

松好齋半兵衞の著、正編は寛政一二年版（一八〇〇）、拾遺は享和二年版（一八〇二）で、後者は人形の記事、及び繪畫に富む。浪速叢書第一五に。

一二 後はむかし物語

手柄岡持の著。享和三年版（一八〇三）。土佐節の人形ノロマ人形の記事あり、溫知叢書第二に。

一三 淨瑠璃譜

原名「諸事聞書往來」、著者、及び出版年代は不明だが、題名を變へたのは文化元年（一八〇四）だ。竹本、豐竹兩座の歷史である。溫知叢書第四に。

一四 我衣

曳尾庵の著。文化年中（一八〇四—一七）の版、小山次郎、竹田カラクリ、南京芝居に就き記す。溫知叢書第一〇に。

一五 塵塚談

小川顯道の著、文化十一年版（一八一四）。山猫の記事

あり、本誌に全文掲載。

一六　嬉遊笑覽

喜多村信節の著、文政十三年（一八三〇）の版。「今我自刊我本」、また「存採叢書」に收めらる。その卷六に、あやつり、のろま、南京あやつり、おでゝこ、からくり人形、獨狂言人形、樽人形、笠人形、ごはん人形の記事あり。

一七　甲子夜話

松浦公の著。文政四年（一八二一）甲子の夜より筆を起す。卷一一にのろま人形の、くはしい記事あり。國書刊行會本に收めらる。

一八　傳奇作書

「言狂作書」とも云ふ、西澤一鳳の著。初編は天保一四年（一八四一）拾遺と殘編は嘉永二年（一八四九）續編は三年（一八五〇）の版。當代の演劇學者だけの立派な記事に富む。新群書類從第一に。

一九　聲曲類纂

齋藤月岑の著、弘化四年版（一八四七）。貴重な古畫に富む。本誌にも大分のせた。

二〇　雲錦隨筆

木村明啓、（曉鐘成、曉晴翁、蒹葭堂）の著。文久元年版（一八六一）。卷四に、のろま人形、及び操人形一體の記事あり、日本隨筆大成卷二に。

二一　音曲道智論

著者、年代共に不明。卷一に淨るり操の起り、人形山猫、とうこいといふ事、卷二に太夫、手づま人形、のろま人形の事などを記す。音曲叢書第二に。

以上は簡單に分るものだけを擧げたので、まだ此の他に西鶴本や、日記類を調べると、いくらも有る筈だが、今、その時間がない。とにかく「古事類苑」樂舞部卷二、「廣文庫」を一通り目を通して下さい。

近頃のもので、小澤さんが書かれた以外のものを、「劇」の昭和二年三月の「人形芝居號」に、書名が記されてゐるのを寫すと

鳶魚隨筆（撫養と淡路の人形）――三田村鳶魚。

竹本劇と其作家――岡本綺堂。

國語と國文學第二五（西宮、淡路、京都の操の關係――及び傀儡、道薬坊、百太夫に就て）――志田義秀。

早稻田文學大正十年四月號（阿波の人形芝居――副島八十六。

皇典研究雜誌大正元年號（傀儡師の研究、特にこれの道祖神信仰に就て）――吉井太郎。

（古代國語の研究（久具都名義考）――安藤正次。

藝文第二年(古表八幡の傀儡子)――濱田青陵。
江戸軟派雜考――尾崎久彌。
演劇新潮昭和二年一月(ハーゲマンの見た文樂の人形)――小宮豐隆。
日本演劇史論――吳文炳。
劇壇縱横、大正十四年十月號(文樂座號)。
繪入淨瑠璃史――水谷不倒。

以上の書名を並べた「劇」にも、豐富な記事がある。「未刊隨筆百種」には、ノロマ人形の脚本集の「迂鈍」及び淡路人形の資料、「操曲入門口傳之卷」の珍書が收められてゐる。

朝倉無聲の「見世物研究」には、カラクリ人形の記事が多い。

本年二月の「演藝畫報」は、人形芝居研究號である。此の雜誌や、前の(今のでない)「歌舞伎」にも記事が多い。人形芝居の型の筆記は、極めて困難だが「歌舞伎」には、重の井子別れ、壺坂、及び忠臣藏や太十の略型がある。「邦樂」の先代萩の略型も、型略とは云へ、要領の好い記事である。

オシラ樣、その他の古いところは、「鄕土研究」「土俗と傳說」「東北文化研究」にある。

吉井太郎氏は別に「淡路ト西宮ニ於ケル人形操ノ調査」の小冊子がある。

小澤愛圃氏の文章は、あちこちに散見する。同氏は一番數多く書いた人であらう。

最後に我が「民俗藝術」の昨年度に就て云ふと

人形舞はし雜考(一號)――柳田國男。
各地の人形芝居(二號)――小澤愛圃。
三河北設樂郡の人形芝居――早川孝太郎。
秩芝人形(二)――小寺融吉。
八王子車人形(三)――小田內通久。
八王子車人父の話(五)――同　氏。
大垣の人形山車(同)――川村義太郎。
秩父人形の舞臺(同)――藏田周忠。
人形劇隨筆(九)――南江二郎。
淡路及び西宮の人形(十二)――吉井太郎。

これだけある。

昨年の讀賣新聞に、何月頃であつたか、花やしきの糸あやつりの記事が長く續いた。貴重な文獻である。

最後に、これが文字どほりの未定稿の走り書きであること、それで筆者の署名は恥しくて逃げたことを、告白しておきます。